

令和5年度

板橋区総合教育会議

令和5年9月7日

板橋区 総務課

令和5年度板橋区総合教育会議

日時 令和5年9月7日(木)
開会 午前10時30分
閉会 午後0時00分
場所 板橋区役所南館6階 教育支援センター
出席者

区長	坂本 健
教育長	中川 修一
教育長職務代理者	高野 佐紀子
教育委員	長沼 豊
教育委員	野田 義博

欠席者

教育委員	青木 義男
------	-------

出席した事務局職員

政策経営部長	篠田 聡
政策企画課長	吉田 有
総務部長	田中 光輝
総務課長	荒井 和子
区民文化部長	林 栄喜
スポーツ振興課長	田中 一誉
区民文化部副参事	浅子 隆史
教育委員会事務局次長	水野 博史
地域教育力担当部長	雨谷 周治
教育総務課長	諸橋 達昭
学務課長	金子 和也
指導室長	氣田 眞由美
新しい学校づくり課長	柏田 真
学校配置調整担当課長	早川 和宏
施設整備担当副参事	伊東 龍一郎
生涯学習課長	太田 弘晃
地域教育力推進課長	高木 翔平
教育支援センター所長	石野 良恵
中央図書館長	松崎 英司

議題等

- 1 開 会
- 2 区長挨拶
- 3 令和4年度総合教育会議の検討課題の報告
- 4 議 題
「スポーツや文化芸術など生涯学習社会をめざした部活動の地域移行」
 - (1) プレゼンテーション
「区立中学校の部活動の現状」 板橋第三中学校長
「ジュニアリーダー活動の現状について」 地域教育力推進課長
 - (2) 協議
- 5 閉 会

傍聴者 2名

○区長

皆様おはようございます。

本日は、お忙しい中ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。

ただいまから、令和5年度板橋区総合教育会議を開会いたします。

中川教育長、並びに教育委員の皆さんにおかれましては、日頃から板橋区の教育の伸張発展にご尽力を賜り、この場をお借りしまして、改めて感謝申し上げたいと思います。

誠にありがとうございます。

この総合教育会議については、地方教育行政の組織及び運営に関する法律によりまして、地方公共団体の長と教育委員会が、教育行政について、協議・調整を行い、両者が教育施策の方向性を共有するなど、連携体制の強化を図るために、設けられている会議であります。

教育を行うための諸条件の整備、その他地域の実情に応じた教育、学術、文化の振興を図るため、重点的に講ずべき施策について協議する場でもあります。

本日の議題は、「スポーツや文化・芸術など、生涯学習社会を目指した部活動の地域移行」についてであります。

教育委員の皆様からは、それぞれのお立場から、様々な観点でのご意見を頂戴したいと思います。

その前に、昨年度のテーマでありました「誰ひとり取り残さないための居場所づくり」について、主な検討課題に対する進捗状況の報告を聴取いたします。

それでは、総務課長から報告をお願いいたします。

○総務課長

令和4年度板橋区総合教育会議におきまして、教育委員の皆様からいただきましたご意見や、主な検討課題に関する区長部局における進捗状況等につきまして、報告をさせていただきます。

昨年9月8日に実施いたしました総合教育会議の内容につきましては、会議の終了後、速やかに区関連部署へ情報提供を行いまして、課題等の解決に向けて、検討し、取り組んでまいりました。

今回の報告内容につきましては、会議当日のご意見等の中から、本日も協議いただく「部活動の地域移行」に関する内容を中心に、5点取り上げさせていただきます。

それでは、恐れ入りますが、資料1をご覧ください。

令和4年度のテーマは、「誰ひとり取り残さないための居場所づくりについて 一青少年の社会的自立に向けた力を育むために」でございました。

課題及び取組状況でございます。

1点目、「エコポリスセンター等様々な施設や活動の中に、興味関心を持つ子どもを巻き込み、多様な居場所として広げていくことが重要である」というご意見をいただきました。

一例といたしまして、資源環境部のエコポリスセンターの取組状況をご紹介させていただきます。エコポリスセンターでは、図書の貸出や工作、塗り絵等の実施を通して、日常的な子どもの居場所を提供しておりまして、子どもたちの希望が多い事業の実施や、デジタル技術を活用した環境教育を行っております。また、ライブ配信やARを活用したデジタルイベントの実施で、子どもや若者に、よりわかりやすく参加しやすい事業展開を図っているとのことでございます。

2点目でございます。多様な居場所づくりに加えて、小学生や中学生への滑らかな接続や年齢交流、幼児と小学生等により子どもたちの成長につなげていくため、CAP'Sやi-youthの利用制限を見直して、利用しやすくするのはどうかと

いうご意見をいただきました。

これまでの取組状況でございます。CAP'Sにつきましては、令和3年度よりコロナ感染症拡大防止対応として、小学生の利用につきましては、事前登録や保護者同伴とするなど利用制限を行ってございましたが、感染状況に応じて、順次、利用制限を見直し、乳幼児と一緒に参加できるプログラムを設けるなど、利用制限を緩和しております。さらに、感染症法上も5類移行に伴いまして、すべての利用制限を解除し、小学生の利用者数は対前年度比で1.8倍と大幅な利用者増となっているとでございます。

また、参考といたしまして教育委員会事務局所管のi-youthでは、春休み期間に小学6年生を対象にプレ利用を実施し、中学生へi-youth利用の滑らかな接続と利用者の異年齢交流を試行したとのことです。

裏面を、ご覧ください。

同じく、CAP'Sにつきましては、夏休み期間中に、小学生がCAP'Sを利用できることがあまり知られていないので、本を読んだりゲームをしたり、静かに過ごすことを伝えていくと良いのではというご意見をいただきました。

小学生のCAP'S利用に係る周知につきましては、小学校全校で、小学生利用についてのポスターの掲示のほか、新一年生の児童に対し、入学後も継続して利用できること、夏休み中も利用できることの案内を行い、小学生の利用促進を図っているとのことです。

4点目でございます。居場所としての地域における部活動につきましては、地域移行にあたって、地域に丸投げするのではなく、社会教育として教育委員会がリードして再編する必要があり、区長部局と連携して、進める必要があるとのご意見をいただきました。

取組状況でございますが、中学校の部活動に関しては、町会や地域ボランティア、スポーツ、文化芸術関係者及び団体等は、令和4年度末までは、特段の関わりはなかったとのことです。教育委員会の検討の状況を注視して、事務局等からの問い合わせに関しては、相談や情報提供を行ってきたとのことです。また、教育委員会事務局からは、文化団体連合会の役員会及び板橋区体育協会や総合スポーツクラブプリムラに対しまして、今後の方向性について情報提供を行ってございまして、今後も区長部局と教育委員会双方で、相談や情報提供を行い、連携及び協力体制を強化していくとのことです。

最後に5点目です。それぞれの居場所では、人材の確保が重要であり、子どもたちの心に寄り添える人材をiCSや地域ボランティア、PTAといった方達に協力を求めていく必要があるとのご意見をいただきました。

地域人材の事例としては、板橋総合ボランティアセンターでは、子どもの居場所等に特化した活動を行ってはいないが、関係する相談等があればボランティア活動の紹介など、相談やコーディネートを行ってございまして、特に地域コーディネーター向けの出張講座については、地域教育力推進課を通じて、情報提供を行っているとのことです。

以上5点につきまして、区長部局と教育委員会が連携した、よりよい居場所づくりと学習の場と機会の提供に関する取組の進捗状況の一端をご報告させていただきました。

本日、これからご協議いただくテーマにつなげて、今後も教育委員会との一層の連携強化を進めてまいりたいと存じます。

報告は以上でございます。

○区長

説明ありがとうございました。

ただいまの報告につきまして、ご質問等ございましたらご発言願います。いかがでしょうか。

(意見なし)

それでは、ご質問がないようでございますので、本日のテーマでございます「スポーツや文化芸術など、生涯学習社会を目指した部活動の地域移行」について、議論を始めたいと思います。

まず、協議に入る前に、「区立中学校の部活動の現状」について、板橋第三中学校 武田校長先生から、「ジュニアリーダー活動の現状」について、地域教育力推進課長からそれぞれ説明をお願いいたします。

○武田校長

皆様、こんにちは。板橋区立板橋第三中学校校長 武田幸雄と申します。

「区立中学校の部活動の現状」ということで、本日は、板橋第三中学校の話をさせていただきます。

まず、私が本校に着任いたしまして、今年で7年目となりました。長く勤務させていただきまして、誠にありがとうございました。7年前、私が最重要課題として掲げたのは、学力向上でした。と申しますのも、着任して早々に、学力向上加配の希望調査が届いたからです。

細かい説明は、釈迦に説法なので省きますが、簡単に申しますと、前年の全国学力学習状況調査、いわゆる全国学テで、国語、数学ともに全国平均を5ポイント以上下回っている学校に、希望すれば1人多く教員を配置するという調査でした。これを受けて、私は教員の増員以前の問題として、学校独自の学力向上策を、幾つか教員に提示いたしました。その提案に対し、当時、本校のミドルリーダーとして活躍していた教員から返ってきた答えは、「校長先生、私たちが殺す気ですか」でした。話を聞くと、「平日の放課後は、夜の7時まで、部活動指導。土日も最低1日。下手をすると、両日、部活動に費やす毎日。その上で、校長先生の提案を受け入れるとなると、これはもう死ねと言われているようなものです。」物の言い方としては、半分冗談だったように思いますが、実態が確かにそれに近いものがありました。

そこで、私は優先順位を明確にしました。いわく、「私たち教員の免許資格には何と書いてあるか。そこには、「中学校野球」とか「中学校バスケ」等とは書いていない。「中学校英語」「中学校数学」等と書いてあるはずである。だとしたら、まずその本来職務に時間と労力を費やし、子どもたちの学力を向上させることこそが、我々の本分なのではないか。その本分を全うできない原因の一つに部活動があるならば、私は、現在の部活動のあり方を大きく変えます。」

そう宣言した上で、私は着任して間もなく、教員の意識調査をアンケート形式で取りました。

質問項目と結果は、このとおりです。スライドでは見えづらいので、お手元に同じものを印刷して配らせていただきました。詳しくは、そちらをご覧ください。

自由意見等を見ると、当時の部活大好き熱血教員の私に対する反発も感じております。一方で、部活大好き熱血教員は、キャリアや校内の力関係で上位に位置するものが多く、そういう教員の陰に隠れていたサイレントマジョリティーの声も、拾うことができました。

また、質問1の10年前。つまり、平成19年から29年にかけて、土日の部活動がふえた理由では、選択肢の「カ. 本来は、平日に行う職務を、土日に出勤して行うようになり、それに付随して、部活も行うようになったから」と答えた教員が12名で最多。

次に、選択肢イの「土日の部活動を希望する保護者が増えたから」が10名で、続きました。だとしたら、まず、平日の職務は、平日で完結できる部活動にすること、続けて、保護者への説明責任を果たしつつ、土日の部活動を原則なくすることが改革の1丁目1番地だと考えました。

その考えに基づき、7年前から約4年間かけて取り組んできた改革のビフォーアフターは、以下のとおりです。

まず、平日の部活動についてです。7年前の下校時間は、3月から11月までの9ヶ月間が夏時間で6時30分であり、12月から2月までの3ヶ月間が冬時間で6時でした。夏を9ヶ月間、冬を3ヶ月間ととらえる感覚もさることながら、この下校時間は、いずれも活動終了時間という解釈がなされており、実質的な下校時間はさらに30分間後ろにずれていた。つまり、9ヶ月間は7時下校、3ヶ月間は6時30分という実態でした。活動日数は、自主練習も含めて5日間まで。つまり、平日は毎日活動できました。現在は、下校時間は年間を通して5時30分を努力目標とし、6時を必達目標としています。これは文字どおりの完全下校時間。活動日数は最大4日間、できるだけ3日以内とし、自主練習はなしです。

次に、土日祝日の部活動についてです。7年前は特に制約はなく、顧問の裁量で実施可能でした。現在は原則として活動しておりません。

長期休業中の部活動についてですが、これも7年前は顧問の裁量で実施可能でした。現在は、夏季休業中は、活動日の上限をできるだけ15日以内におさめ、どんなに多くても、20日を超えないようにしています。冬季休業と春季休業中は夏季休業中の比率に準じています。こうした運営方法の中、現在は七つの運動部と六つの文化部が活動しています。そして、そのうちバドミントン部では、教育委員会のご高配により、部活動指導員を導入していただいております。その効果について、男女合わせて4名いる部活動顧問に尋ねると、時間的労力的な負担軽減感は6割から7割。精神的な負担軽減感は9割以上と申しております。写真左側の後姿の者が、部活動指導員でございます。

また、それまで板三クラブという地域野球チームと一体化していた野球部も、完全に分離させました。顧問が、板橋第三中学校として出場する中体連の大会だけでなく、軟式野球連盟の主催する大会への引率等も、行っていたからです。現在も、そうした形態をとっている学校の野球部もあると聞いておりますが、それを苦痛と感じている顧問もいるということ、そういう形態は教員の異動により、持続可能とは言えないことを、まず管理職が認識するべきかと思えます。

ちなみに、現在本校の多くの野球部員は、平日は、板橋第三中学校の野球部で活動し、土日、祝日等はブラーヴスという保護者やOBが指導する地域クラブに所属し、年間3万円の受益者負担で野球に打ち込んでいます。

冒頭で申し上げましたように、もともと学力向上を目的に始めた部活動改革ですから、それらが奏功したかどうかは、学力で検証する必要があります。しかし、学力向上は、様々な行政施策や支援、生徒の努力、家庭の協力と教員の授業力向上等が相まって成し遂げられるものです。従って、部活動改革がどれだけの役割を果たせたかは不明確であることを前置きした上で、申し上げます。

これも冒頭で申し上げましたように、7年前の本校は、全国学力学習状況調査の国語、数学の両教科とも全国平均を5ポイント以上下回っておりました。それが、先月発表された直近のデータでは、国語は全国平均を約5ポイント上回り、都の平均よりも3ポイント高く、数学は全国平均を3ポイント上回り、都の平均とほぼ同じ。英語は全国平均を7ポイント上回り、都の平均より1ポイント高いという結果でした。相対的には、まだまだ物足りないかもしれませんが、7年前と比べて、国語は10ポイン

ト以上、数学は8ポイント以上の伸び率があるというのは、ある程度の評価に値すると思っております。また、生徒の質問紙調査の結果を見てみますと、「普段平日平均して何日部活動に参加していますか」という質問の回答では、参加日数が全国や都と比べて少ないことがわかります。「約1%、5日」と回答した生徒は、週1回活動する負担の少ない文化部を兼部している生徒と思われまます。普段、平日1日当たりの活動時間を尋ねる質問でも、本校は全国や都と比べて短くなっています。やはり活動時間というより、完全下校時間について、年間を通して短くした結果かと思われまます。また、土日等休みの日の1日当たりの活動時間でも同様の結果が出ています。本校では、原則として、土日祝日の部活動はやっておりませんが、部活動指導員のいるバドミントン部は例外です。また、大会前の練習がずっと雨でつぶれたので、特別練習をしたい。たまには、練習試合を組みたいといった部活もあります。そういう場合は、私の許可を得て活動する日もあるため、全くゼロにはなっておりません。では、以上のようなことにより、本校の部活動参加率は低いかというと逆の結果が出ていて、「部活動に参加していますか」という質問では、全国や都より割合が高くなっています。今度は、教員や授業改善に視点を移して見てみると、「授業の中で、タブレット等のICT機器をどの程度使用しましたか」という質問に対し、実に約95%の生徒がほぼ毎日と答え、全国や都と比べ、圧倒的に高くなっているのが一目瞭然です。そして、それに続く「タブレット等を使うのは、学習の役に立つと思うか」という問いでは、75%以上の生徒が「そう思う」と答え、「どちらかといえばそう思う」と合わせると、ほぼ100%と高い数値を示しています。そして、最後に、「先生は授業やテストで間違えたところ、理解していないところについて、わかるまで教えてくださいか」という質問に対し、「当てはまる」と答えた生徒は、全国や都の平均を大きく上回っています。

これらのことは、部活動改革で生み出した時間と労力を、教員が本来職務である指導法の工夫改善や、一人ひとりの生徒と向き合う時間に費やしたことも背景にあると考えています。私たちは、子どもたちのために、限られた財源を有効活用するために、常に費用対効果を考えなければなりません。同時に、教員にとって、限りある時間と労力を本来職務に振り分けるためには、時間対効果、労力対効果も考える必要があります。その際に、避けて通れないのが、部活動改革であり、それを断行するためには、行政や地域を始め、誰かが部活動を引き上げてくれるのを待つのではなく、学校が、自ら部活動という名の大政を奉還していく必要があると思っております。

とはいえ、それは江戸幕府のように、いきなりすべてを放り投げる大政奉還ではなく、保護者や生徒の理解を得つつ、できるところから、それでも確実に部活動からフェードアウトしていく大政奉還です。そして、それを実現するための第一歩は、私たち管理職も含め、生活指導上、部活動は必要であるとする教員、自分は野球をやるために、バスケットをやるために教員になったと言ってはばからない教員の意識改革であると私は考えています。

では最後に、部活動の土日祝日の原則なしを打ち出した際には、私がすべての矢面に立って、保護者会で説明しました。今では、新入生保護者対象の学校説明会でも、部活動の方針を述べています。その際に使う原稿をそのまま読み上げて、私の説明を終わらせていただきます。

部活動は、本校は普通に活動する学校です。

やらないわけではありません。

普通に活動です。

従って、うちの子はどうせ勉強なんかやらないから、とことん部活動をやってく

ださいというご家庭やお子さんには向かないかもしれません。

本校では、板橋区の定める部活動の上限時間内で、それを平日に割り振る形をとっています。

従って、原則として、土日祝日の部活動は行いません。

しかしながら、どの部も熱心に取り組み、その活動を通して、多くの生徒が達成感を味わっております。また、教員は、部活動のない週末に、心身とも体調を整えたり、自己研鑽に努めたりして、次世代型の学習支援、生活支援、よりわかりやすく、きめ細やかな授業の構築に向けた準備を進めていることを申し添えておきます。

私からの報告は以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

○地域教育力推進課長

教育委員会事務局地域教育力推進課長の高木と申します。私からは、板橋区における「ジュニアリーダー活動の現状」について、ご説明させていただきます。よろしくお願いいいたします。

ご承知のこととは存じますが、ジュニアリーダーは、地域行事等の様々な社会体験を通じまして、地域の大人や異年齢の子どもたちといった多様な人たちとの交流をいたしまして、将来の地域人材の育成、青少年の健全育成、或いは豊かな人間関係や思いやりの心の醸成を図るといったものでございます。ジュニアリーダーは、小学校4年生から高校3年生までを基本としておりまして、高校生以上については、ジュニアリーダーの顧問として活動を継続しているものでございます。実際に、区内でどの程度のジュニアリーダーがいるのか、規模についてお話させていただきますと、年度別の登録者数を表したものがこちらの表でございます。下から、小学生、中学生、高校生、顧問というような見方でございます。高校生、顧問につきましては、少しずつ上昇傾向にあるといった状況でございます。小・中学生については、年度ごとに多少の増減がございまして、中学生については、概ね300人強といった横ばいの状況でございます。

続きまして、地域においてどのように子どもたちをジュニアリーダーとして育成しているのかということについて、ご説明をさせていただきます。

ジュニアリーダーの育成については、主にジュニアリーダー体験学習事業を通して行っております。地域センター単位、18地区でジュニアリーダー会を組織しておりまして、それぞれの地区ごとに地区別活動を実施しております。また、隣接の3地区ごとにブロック活動も併せて実施しております。主には、地域行事への参加をしておりまして、ジュニアリーダーが企画し打ち合わせ準備を行いまして、実施をするというものでございます。体験学習事業の実施形態といたしましては、区から青少年委員会へ委託する形で実施しております。青少年委員によるジュニアリーダー育成に関しましては、小中高、高校卒業以上の顧問というところで、それぞれの育成方針を持って実施しているといったところでございます。

では、そのジュニアリーダーの年代別の育成方針について、簡単にご説明をさせていただきます。主に、小学校、中高生、それから高校卒業以上の顧問に分けられております。

小学生については、中高生のジュニアリーダーのお手伝いをするとしたこと、将来のジュニアリーダーとしての自覚と意欲を醸成しようということで行っております。

中高生につきましては、各地区のジュニアリーダー会の中心として、地域行事の企画、運営に参加するという点では共通しておりますが、中学生については、地域の子どもたちのリーダーを育てるといった視点、高校生についてはジュニアリーダーの育成を担っていただいている青少年委員とともに地域活動に参画できるように育

成をしているというものでございます。

また高校卒業以上につきましては、顧問としての活動のほか、ジュニアリーダーに対しての指導、助言を行っているほか、青健地区委員会等の地域活動に参加することを推奨しております。

こうした育成方針のもと、ジュニアリーダーの活動実績について、簡単にご説明させていただきます。

まずは、全体的な令和4年度の実績についてお示しさせていただき、平均的な活動状況をお伝えできればと思います。

隣接3地区の形成で実施しておりますブロックでの活動が、各ブロックで年間5回から8回。18地区の各地区活動につきましては、時期により偏りがございますけれども、平均で年間15回ほど活動しております。活動場所としましては、地域の学校の場合もございますし、各地域センター或いは集会所、公園等も実施場所となっております。

それでは、ジュニアリーダー活動の代表的なものを幾つか事例を持ってご説明させていただきます。

一つは地区別キャンプに関するものでございます。キャンプについては、各18地区におきまして、主に地域の小中学生を対象として、2泊3日で自然体験活動を行っております。こちらは舟渡地区におきまして、八ヶ岳にキャンプに行った時のものですけれども、行き帰りのバスの中で、ジュニアリーダーが中心となりまして、参加者とレクリエーションを行ったというものでございます。伝言ゲームであるとかクイズであるとかそういったレクリエーションといったものでございます。青少年委員の方から指導を受けまして、7月上旬から舟渡地域センターで、キャンプ前から何度も練習を重ねまして、参加者が楽しめるよう試行錯誤したというものでございます。

初めての参加者は、非常に緊張しておりますので、こうした遊びを通して、他の参加者と打ち解けられたり、互いの理解を深める活動を子ども主体となっているものでございます。

また、キャンプといえば、キャンプファイヤーでございまして、こちら蓮根地区のキャンプファイヤーの写真でございますけれども、ジュニアリーダーが始めから終わりまでをメインで担当するイベントでありまして、参加者が安全で楽しめるように、最も練習を重ねるものでございます。

キャンプについては6月下旬から、蓮根地域センター会議室等で、打ち合わせや勉強会を行っております。キャンプファイヤー当日は、火を点火したり、参加者とレクリエーションを通してジュニアリーダーがキャンプを盛り上げております。このほか、キャンプにおいては、早朝のラジオ体操で見本を示したり、川遊びでゲーム進行をしたり、ジュニアリーダーが日々の成果を発揮する絶好の機会というようになっております。

続きまして、12月ごろに各地区で実施しておりますクリスマス会についてご紹介をさせていただきます。

桜川地区のクリスマス会の写真であります。昨年の12月に、桜川地域センターのレクホールで行われたものでございます。

ジュニアリーダーは、ミニゲーム或いはビンゴ大会などで地域の子どもたちが、気軽に参加交流できる内容を企画いたしまして、事前準備を重ねて、当日は中心スタッフとしての運営を行ったというものでございます。

具体的な事例としては、最後にブロック活動についてもご紹介をさせていただきます。

写真は下赤地区、成増地区と徳丸地区の3地区からなります第4ブロックの活動でございます。

11月の農業まつりの際に、赤塚体育館の運動場におきまして、ブロックでブースを出展いたしました。風車であるとか、くるくる回るUFO型のおもちゃの工作物を、ジュニアリーダーが子どもたちに教えたというものでございます。写真の中で、オレンジや緑色の服を着ているのがジュニアリーダーになります。ブロック活動では、他地区のジュニアリーダーとの交流を通しまして、お互い、学び合う場、高め合う場になっているという点で、また地区別活動とは異なる意義があるというように考えております。

あと、時間の都合もありまして、今回はご紹介できなかったのですが、学校の体育館を利用したポッチャ大会であるとか、ドッジボール大会等のスポーツイベント、それから徳丸地区等では、徳丸六丁目農園で、野菜の種まきから収穫を行うなど、地域別に工夫を凝らした様々なイベントが行われております。

ジュニアリーダー活動については、具体的な事例をご紹介させていただいたのですが、最後にこうした地域の活動に対する評価という観点でお話をさせていただきます。

まず、ジュニアリーダー活動につきましては、本人からの申請がありましたら、青少年委員の確認のもと、随時、教育委員会が活動証明書を発行しておりまして、ジュニアリーダーが様々なキャリア形成を行っていく場で、活用いただいております。

また12月に、他の模範となる善い行いをした青少年を、広く地域の団体等からご推薦いただきまして表彰する、青少年表彰を行っておりますが、ご承知の通り、毎年度こちらは、主に高校生以上のジュニアリーダー経験者が数名、表彰を受けております。4年度は4名のジュニアリーダー経験者が、実際に表彰を受けております。また3月頃に、ジュニアリーダーへの感謝状も贈呈しております。高校3年生のジュニアリーダーを青少年委員からご推薦いただきまして、感謝状を贈呈するといったものでございます。なおこちらは、令和4年度は37名に感謝状を贈呈いたしました。最後に、青少年表彰として感謝状贈呈の際に、撮影した写真でございます。こうした取組は、子どもたち自身が地域での活動が認められることによって、自己肯定感、或いは自己有用感を高めることに繋がっていくというほか、キャリア形成をしていく上で、こうした社会的な評価を次につなげていくための支えになっているのではないかというように思っております。

雑駁ではありますが、私からの説明は以上でございます。どうもありがとうございました。

○区長

説明ありがとうございました。ただいまの説明につきまして、ご質問等ございましたら、ご発言をお願いいたします。

(意見なし)

それでは、ご質問等ないようですので、早速、本日のテーマであります「スポーツや文化芸術など、生涯学習社会を目指した部活動の地域移行」についての協議に入りたいと思います。

最初に、このテーマに沿いまして、まず私から考え方を述べさせてもらいたいと思います。よろしくをお願いいたします。

まず、子どもにつきましては、学校における学業のほか、スポーツや文化芸術活動、地域活動など、様々な体験を重ねる中において、健やかに育ち、多様な人々との関わり合いを通して成長してまいります。小学生時代については、学童野球や学

童サッカー、スイミングなど、音楽、美術に関する習い事や、ジュニアリーダー活動やいきいき寺子屋プランへの参加など、学校外で、数多くの体験型の成長機会があるかと思えます。また中学生になりますと、学校に部活動がありますので、運動部、文化部を問わず、自分が大好きな種目や未体験の種目を選んで、3年間頑張ることを楽しみに中学校への進学に胸を膨らませることもあるかと思えます。

一方において、最近の区立中学校の部活動現場においては、少子化による生徒たちの活動機会の減少が現実のものとなっているように見受けられます。

例えば、人気スポーツ種目の一つと思われますバレーボールについては、女子で15校に部活が存在しておりますけれども、男子においては、4校しかないようでございます。区内の男子中学生がバレーボールをやりたいと思いましても、区立中学校中18校の生徒はできないという現状であります。このような現状につきましては、ある特定の種目の人気度合いによります一時の減少というわけではなく、さらに競技人口が多いスポーツにおいては、野球部を例にとりましても、区内には野球部のない中学校がすでに1校存在しております、その他に、中学7年生の受け入れの停止をした中学校が1校、部員については、9人以下の中学校が3校もあるようであります。また、文化部におきましては、分野の多様性に比べて、参加する生徒の偏り等の問題から、以前から存続が不安定になっていたように思います。

次に視点を変えまして、中学校の部活動を教員の長時間労働という視点で見ますと、現在、区立中学校においては、基本的にすべての教員が、何がしかの部活の顧問を引き受けているようでございます。区の教育委員会には、「板橋区立中学校部活動の在り方に関する方針」というものがございまして、これに沿ってまいりますと、平日につきましては、最低1日の休養は必要でありますけれども、1日の活動は2時間程度にとどめなければならないところでございます。それでも平日については、夕方4時から6時ごろまで部活動を行うこととなります。この場合、すぐに帰宅するとしましても、教員の業務終了時間は16時45分であるため、1時間以上の残業となることとなります。さらに、授業準備等の残務整理を行う場合においては、18時頃から次の残業を始めるということとなります。また、休日の部活動については、土日、いずれか1日の休養、1日の活動は3時間程度という目安があるようでありますけれども、それでも、土日のどちらかに毎週のように出勤するというようになるというように聞いております。

さらに、世界に目を向けますと、世界の小中学校の先生と校長へ質問形式の調査をして、国際比較をする有名なものに、OECDの国際教員指導環境調査「TALIS（タリス）」というものがございまして、最新の調査においては、2018年に行われました「TALIS（タリス）2018」でありますけれども、この中において、日本の中学校の先生の状況を見ますと、週の仕事時間は56.0時間でありまして、48カ国中トップでございまして、ちなみに、2位はカザフスタンでありまして、48.8時間であり、2位以下との差が大きいことも特徴となっております。

この我が国の中学校の先生の長時間労働の原因を、「TALIS（タリス）」からもひもときます、生徒の指導とは直接関係のない業務である事務業務が長いことと、課外活動指導、いわゆる部活動の時間が長いことが挙げられるかと思えます。

ところで、これまで申し上げましたように、中学校の部活動を取り巻く環境については、課題が幾つかあり、その持続可能性が危ぶまれているところと感じております。

これらの課題を一体的に解決し、中学生の誰もが成長する機会を得られることにより、先生の働き方改革の一助となるだけではなく、区民の皆さんの人生の幸福度に広く寄与するような策があれば、それに越したことはないと考えます。危機的状

況を逆に絶好の機会ととらえ、新たな施策を実施することにより、チャンスに変えていくアプローチは行政にとって大変重要な行動様式であるとも考えます。今回のケースで、具体的に申し上げますと、部活動地域移行の取組を、板橋区の生涯スポーツ社会、或いは、生涯学習社会の進展の絶好の機会ととらえることであります。

例えば、ジュニアリーダー活動は、小学4年生から高校生までが対象の青少年健全育成活動の一つであります。指導者の役割を果たしてくれております各地区の青少年委員の皆さんは、従来から子どもたちの自主性を尊重した見守りを実施していただいております。ジュニアリーダーのやってみたい気持ちを形にしていくことが、自分たちの役割であると考えていただいております。

このような事業におきまして、子どもの主体性を最大限尊重するという考え方は、中学校部活動の地域移行にあたりまして、大変重要な新しい価値観であると感じています。

また、地域活動、社会貢献活動という枠組みは、学校活動として行われております従来の部活動では、発想としてなかなか出てくることがない地域移行ならではの種目の一つではないかと感じております。さらに、地域移行によりまして、学校が部活動と同等の選択肢として、生徒たちに認知されるようになることで、ジュニアリーダー活動も、これまで以上に多様な参加者を得られる好機となると考えます。活動の頻度が増え、青少年委員や地域の方との世代を超えた交流が深まることも期待ができるかと思えます。ジュニアリーダーでありました子どもたちが将来、地域に戻り、青少年委員としてジュニアリーダーを見守るといったことが多く見られるようになるかもしれません。

ここまで、部活動の地域移行による活動の活性化のイメージを、ジュニアリーダー活動を例にとりまして、お話をさせていただきました。同じような良い循環が、スポーツの分野や、或いは文化芸術の分野でも起こり、中学校部活動の改革が、生徒や先生のみならず、区の生涯スポーツ社会・生涯学習社会がさらに進展するという形によって、広く区民の方の人生をより豊かなものにすることができれば、「部活動を改革しなければならない」というピンチを、逆にチャンスに変えられたことになるかと思えます。区立中学校における部活動の地域移行については、このような考え方で取り組むことが大切であるかとも考えております。

以上、私の方から意見を述べさせていただきましたけれども、教育委員の皆様から順にご意見を伺いたいと思えます。

それでは、初めに高野委員さんからお願いしたいと思います。

○高野委員

よろしく願いいたします。教育委員の高野です。

夏休みに、「部活動の地域移行について」というテーマで、中学校長会と教育委員の懇談会が開催されました。そこで、各校での実態や困り事など、校長先生方から詳しくお話を伺うことができました。サッカー部の入部希望者が減って、単独で大会に参加できなくなって、合同のチームを作り参加したというお話や、今、坂本区長からもお話があった男子バレーボール部や野球部など、少子化による活動機会の減少という問題が、板橋区でも実際に起きていることを再認識いたしました。

また、先ほど板橋第三中学校の武田校長先生からの報告にもあったように、先生方にとって、部活動が大きな負担となっていることも、先生方の切実な生の声として伺うことが出来ました。今までは、部活動の顧問を先生方が担っていることが当たり前になっていましたが、先生方にとって、大きな負担となっていることを真摯に受けとめ、今までの当たり前を見直す必要を強く感じました。

また、今まで部活動は学校だけの取り組みであり、卒業とともに引退することが

常でしたが、地域で継続的に活動できれば、卒業後も、将来にわたってスポーツや文化的活動に親しむことができるようになります。

本日のテーマである、生涯学習を目指した部活動の地域移行の一つの例として、ただいま坂本区長からジュニアリーダーの活動についてお話がありました。私は以前、青少年委員として、地域の子どもたちと一緒に体験活動を行ってきましたが、地域での活動を通して、子どもたちは、家庭や学校ではできない貴重な経験をする事ができたのではないかと考えています。

先ほども、高木課長のほうからご紹介があった夏の野外活動では、参加した小学生が、ジュニアリーダーとして活躍する中学生、高校生、また、ジュニアリーダー顧問として全体をまとめ引っ張っていく、大学生や社会人の姿に憧れを抱き、ジュニアリーダーを目指すきっかけとなっていました。2泊3日の異年齢での活動を通して、先輩たちが生き生きと活動する姿を良いお手本として身近に見ることができました。

また、小学生のころから地域での活動を継続していたジュニアリーダーにとって、高校卒業後の進路を考える際に、地域でのジュニアリーダー活動での経験が役立っていたと思います。

今年の夏休みに野外活動に参加し活躍した3人のジュニアリーダー顧問から、ジュニアリーダー活動で、自分にどんな影響があったのかということを知っていますので、ここでご紹介させていただきます。

社会人一年生のジュニアリーダー顧問です。

「私は病院のリハビリテーション科で、理学療法士という資格を利用して、リハビリスタッフとして働いています。私が勤務している病院の入院患者様の多くが90代です。小学生のジュニアリーダー活動の中で、老人ホームに行く機会があり、そこで学んだ、高齢者の方々との関わり方や楽しさが、今の仕事で活きていると感じています。また、ジュニアリーダーで、小さい子どもと関わるが多かったこともあり、いずれは、小児の分野でも活躍できる理学療法士を目指していこうと考えています。」

大学一年生です。

「私がまちづくりに携わりたいと考えたきっかけは、ジュニアリーダーに入ったことです。ジュニアリーダーの活動で、地域の子どもたちや大人の方と関わっていく中で、地域の温かさややりがいを感じるようになりました。大学を考える際は、その経験を生かし、まちづくりを学びたく、現在の大学に進学しました。将来、自分自身が青少年委員や板橋区で働きたいと考えています。」

ジュニアリーダーで培った経験や先輩から教わったことを、これからもつないでいきたいからです。そして、板橋区の魅力を知り、伝えていきたいと思っています。」

もう1人、大学生です。

「私は、社会福祉士と精神保健福祉士の資格取得に向けた勉強をしています。今、問題になっている社会課題に目を向けて、持続可能な地域共生社会の実現を目指して、社会貢献活動を学び、授業を聞いています。また、地域プロジェクト型学習を通して、地域や社会と連携する力を養っています。人と関わることに少し苦手意識を持っていた私が、ジュニアリーダーの活動を通して、地域の様々な人と繋がる楽しさを知ったことで、大学でこれらのことを学んでいる今の私がいるのだと思っています。」

坂本区長のお話にもあったように、部活動の地域移行により、中学生の地域での活動として、ジュニアリーダー活動が、生徒たちに認知されて、これまで以上に、

多様な参加者が、増えていくかもしれません。ジュニアリーダー活動以外でも、地域移行により、活動の選択肢や頻度が増え、中学校を卒業した後にも、活動を継続することができ、また、地域の方や異年齢の人たちと、世代を超えた交流を深めるなど、生涯学習として、多くの経験をすることが期待できるのではないかと思います。

○区長

ありがとうございました。

それでは、高野委員の発言に関連いたしまして、皆さんから自由に意見交換を行いたいと存じます。ご意見のある方は、どうぞお願いしたいと思います。長沼委員、どうぞ。

○長沼委員

はい。高野委員、ありがとうございました。

確かにこのジュニアリーダーの活動が、部活動の地域クラブ化のヒントになる部分もあるのではないかと思います。高野委員が、異年齢のことをご指摘されていて、小さい頃から小中高、そして大学生以上、社会人まで含めて繋がっていく、しかもそれが地域の皆さんで繋がっていくことのよさがあるというのが、地域クラブの鍵だと思います。つまり、中学生の地域移行と考えると、中学生だけのクラブを作ると思うのですが、もっともっと異年齢で関わる、そういうスポーツクラブや、文化系のサークルでも、社会教育として出来る可能性があるのと、もちろん民間の事業者が入ってくることもあっていいと思いますが、そんな姿を将来的に描いていくことが、本日のテーマなのかなと思います。ありがとうございました。

○区長

長沼委員、ありがとうございました。他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、続いて長沼委員からよろしいでしょうか。

○長沼委員

はい。よろしく願いいたします。

私は、部活動をより良くしたいという思いで、7年前から部活動改革を提唱してきましたので、今回このテーマが取り上げられたことは、とてもありがたいです。先ほどの坂本区長のお考えにも、強く賛同いたしました。私の基本的な考え方は、これまでの部活動が果たしてきた役割や、教育的意義、頑張ってきた先生方の成果を認めつつ、これからは、「やりたい生徒とやりたい先生はできる、そうでない生徒と先生は、やらなくて良い」という仕組みを作ることです。

昨年度の総合教育会議では、居場所としての地域部活動という観点で、地域移行の長所を3点述べました。

一つ目は、生徒は切れ目なく、同じ指導者から指導を受けることが出来ること。

二つ目は、先生のうち兼業兼職で地域クラブの指導者になる方々にとっては、異動に左右されない仕組みになること。

三つ目は、少子化の影響を受けて廃部になってしまう心配がなくなること、です。それを踏まえて、今回は地域移行を進めるための考え方を5点述べます。

第1に、地域クラブ化では、学校部活動ではできなかったことができます。

先ほどの坂本区長と高野委員からのお話のジュニアリーダーのお話のように地域クラブでは世代を超えた交流ができるメリットがあります。対象は、中学生だけと決定しなければ、小学生、高校生も含めて、あるいは、大人も含めて一緒に楽しむことが可能になります。

また、地域クラブでは、その目的を大会やコンクール等での成果を求める成果追求型と、ゆるく楽しむ交流型に分けることも可能になります。

私が、部活動地域移行の検討委員会の委員長を仰せつかっている長野県松本市では、バスケットボールクラブでチャレンジコースとエンジョイコースを設けて活動しています。両方の生徒のニーズを受け止めることができます。

さらに、地域クラブでは、これまでの学校部活動でできなかった新しい種目に取り組むこともできます。松本市では、バドミントン部がある中学校は少なかったのですが、中学生のアンケート調査でやってみたい種目の上位にあったため、地域クラブをつくりました。その結果、たくさんの中学生が参加しています。このように、部活動の地域移行では、学校部活動では出来なかったことが出来るチャンスと言えます。

第2に、地域移行というよりも、地域展開と考えたほうがよいです。

地域クラブでは、発想次第でいろいろな取組が出来るわけですから、「一つの学校の一つの種目のクラブを地域に一つ移して用意しないといけない」と考えなくてよい、ということです。その際、移していくという意味の「移行」という言葉を使うと、そのようなイメージが先行してしまっていて大変だと思ってしまう。しかし、例えばいくつかの学校を含めたエリアで一つの地域クラブがあるのでも良いと考えれば、ハードルが下がります。

第3に、板橋区らしいやり方で進めていくと良いということです。

私は、昨年度から科研費をいただいて「部活動の地域移行のモデル構築に関する学際的研究」という4年間の共同研究を進めています。その研究で各地の自治体を訪ね、教育長や校長先生、部活動の顧問、地域の指導者、生徒たちの様々な声を聞いてきました。そこで感じることは、地域移行を始めてみると、いろいろな課題はあるものの、関係者は手応えを感じているということです。ある顧問の先生は、「土日の負担がなくなっただけでも助かっている」と実感を込めて話してくださいました。また、ある生徒は「専門的な指導者から教わるので、上達できて嬉しい」と語ってくれました。

各自治体の検討内容や実施の方法は様々です。板橋区は人口減少や少子化は緩やかな進行の予測ですが、これらが既にかなり進行している地方の都市や市町村では、待ったなしの状況で、検討と実現のスピードを加速させています。子どもたちが、やりたいスポーツや文化活動ができる環境を目指して、教育委員会が中心になって努力しています。さらには、首長部局が、この問題は教育だけでなく「まちづくり」に関わることだとして、予算をつけて進めています。なぜなら、中学生が少子化の影響に関係なく、好きなスポーツや文化活動が地域で出来る自治体に、子育て世代の保護者はお子さんとともに移り住んでくるからではないでしょうか。

このような事例も参考にしつつ、しかし板橋区は板橋区らしい進め方でよろしいのではないかと思います。

第4に、まずは休日の部活動を早めに地域展開することです。

先ほどの武田校長先生のお話のとおり、先生方の負担軽減も待ったなしの状況です。休日には無理という先生方は担当しなくても良い、逆にやってもよいという先生方は、兼職兼業で出来るという、両者に配慮した仕組みを早く実現しなければなりません。教育委員会では、「直近のマイルストーン（第一次目標）」として、「土日における部活動の教員に頼らない指導体制の構築」を掲げていますので、この実現を強く求めます。

第5に、地域展開の前に学校で出来ることはあります。

合同部活動が1例です。少子化の影響で、生徒がやりたいスポーツや文化活動がで

きないという状況を避けるため、地域クラブへの展開の一手手前に、「合同部活動」を位置付けて、近隣校と協力して、もちろんICSや地域の皆さんの協力を得ながら進めてほしいと思います。合同部活動で、移動が伴うことへの理解が進むことで、その次のステップの地域クラブ化の可能性が見えてくるということです。

以上、私からは5点、①地域クラブ化では学校部活動でできなかったことが出来ること、②地域移行というよりも、地域展開と考えて進めたほうが良いということ、③板橋区らしいやり方でいいということ、④まずは休日の活動を早めに地域展開すること、⑤合同部活動など、地域展開の前に学校でできることはあるということ、を述べさせていただきました。

○区長

ありがとうございました。それでは、長沼委員のご発言に関連いたしまして、皆様からご意見ある方からご発言願いたいと思います。いかがでしょうか。はい、中川教育長お願いいたします。

○教育長

現実的に、土日に地域展開又は地域移行ということ、とにかく進めていく際に、どういう方法がとられているのかという具体的なお話をうかがわせていただければよろしいでしょうか。

板橋区は、今22の中学校があって、約300ある部活に関して、土日の部分を地域移行或いは地域展開していくというときに、どんな方法があるのかな、外部指導員をそこにつけるという手もあるのですけれども、おそらく結構大きな予算が必要になっていくわけです。実際に行われている地域では、こういった進め方が行われているのか、ご示唆いただければと思います。

○区長

長沼委員さん、お願いいたします。

○長沼委員

はい。これは自治体によって様々でして、一つは、先ほど申し上げました、まずは合同部活で始めて、そこから地域指導者に委ねていくということを考えているところもあります。

それから、外部指導者や部活動指導員がいるところは、指導者がいるわけですから、その方が中心になって土日の部分は「私たちが見るよ、学校の先生はいいからね」という形で地域クラブ化していく方法を取っているところもあります。

あとは、民間クラブで土日は私たちができませんという形で入ってきている企業もあります。

それから、教育委員会によっては、コーディネートそのものを、地域の民間の会社に委ねて、スポーツクラブ等で繋がっている、そういうネットワークを持っている会社もありますので、運動系ですけれども、そういう会社と一緒に進めている教育委員会もありまして、本当にいろいろですね。いろんな形で、自治体に合った形で、土日を、まずは先生方の負担を減らしましょうということで、少しずつ地域クラブ化をしていくというような、そんな現実があります。

○区長

はい。ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

高野委員、どうぞお願いいたします。

○高野委員

今、長沼先生のお話にあった5番目の合同部活ということで、夏休みに中学校長会の先生方と懇談会を行った中で、各グループでお話をしたのですが、私の入っていたグループでは、先ほど申し上げたサッカー部で大会に出られなか

ったという学校が、近隣の3校で出場したときに、この合同部活に対して、実際にやってみてとてもよかったというようなお話がありました。問題点は、きっといろいろたくさんあると思うのですが、地域展開の前に学校でできることはあると感じました。

○区長

はい、ありがとうございました。他にいかがでしょうか。では、野田委員どうぞお願いします。

○野田委員

ありがとうございました。私も、長沼委員のコメントに関して、本当に強く賛同いたしました。最近、思ったところでいきますと、高校野球でもそうですが、今回我々が考えて取り組んでいるようなことが、様々な活動に置いて、改革されて、そういった活動をされてきた子どもたちが、すばらしい成績を残されたりといったところが記憶に新しいところでありますけれども、実際に、その活動時間の見直しをされたりとか、考え方、また違った活動以外でのコミュニケーションのとり方、そういったところがやはり成績に結びつくといったところは、小学校、中学校においての部活動や地域の活動にも生かしていけると思いますし、非常に良いモデルになっているのではないかと思っております。私が勉強になったところでもあります。実際に、現在行われておりますいたばし地域クラブの活動におきましても、立ち上げから事務局の方々を始め、多くの方々への協力を得られ、順調に部活動を出発しているといったところも、大変喜ばしいところでもありますので、こういったモデルを活用しつつ、また新しい考えをもとに、次に行かせていければと私も思いました。

○区長

はい。ありがとうございました。他にいかがでしょうか。では、中川教育長どうぞお願いいたします。

○教育長

これは長沼委員というよりもこの部活動については、やはりかなり意識改革をしていく必要性を感じます。つまり、部活は学校がするもの、先生がするものという前提が意識に根づいてしまっている。これを展開していくということは、とても大変なことだなというように思っているのですけれども、そのあたりについて、長沼委員はどうお考えでしょうか。

○区長

はい。長沼委員、どうぞお願いいたします。

○長沼委員

おっしゃるとおりです。部活動の今の仕組みが出来上がるまで、70年ぐらいかけて育ててきたもの、あるいは培ってきたものですので、この構想を簡単に変えることはなかなか難しいのではないかなというのは当然あると思います。

大きな転換になったのは90年代に、学校週5日制になったときに、土日をどうするのかって議論のときに、ここでやはりきちんとした形のすみ分けをしてこなかったことが原因で、実際に部活動の歴史を見ると、平成に入ってから、かなり過熱化しました。つまり、学校週5日制になってから、土日もできるよっていうことで、それも原因にあると思いますので、実は、そのときにちょうど生徒であった方々が、今保護者でいらっしゃって、保護者の方から見ると、今の部活動は学校がやって当然でしょうと、土日も先生方見てくれますよねってことが当たり前になっている。

先ほど、高野委員がおっしゃった、今までの当たり前を変えて見直していくっていうことをおっしゃっていただきましたが、本当にそのとおりで、その辺

の意識改革も含めて、教育委員会も、しっかりとマネジメントしながら進めていく必要があるのかなというように思います。

それから、もちろん先生方もそうで、先生方の中には、もちろん部活大好きって、先ほど武田先生がおっしゃったような先生方もたくさんいらっしゃいますけれども、そうではない先生方もたくさんいらっしゃって、もう限界ですっていう方々もいる。そういう方々もいるということ、学校教育全体、先生方の集団でも、意識改革をする必要があるのかなと思います。

○区長

はい、ありがとうございました。ほかによろしいですか。

皆さんありがとうございました。それでは、続きまして、野田委員からお願いします。

○野田委員

私は保護者の立場から、この今回のテーマについて考えを述べさせていただきたいと思います。

やはりこれまで、坂本区長をはじめ、高野委員、長沼委員がおっしゃられたように、現状に即した形の地域移行に於ける考え等、具体的な方向だとか、そういったところに関しては、引き続き検討はされていくわけでありまして、実際にこれまでの先生方が、長い時間を費やしていただいて活動されてきた部活動において、どういったことが、子どもたちにとって得られる気づきだったり学びだったりといったところがあるのかということ、を少し考えてみました。

部活動というところは、日常の学校生活から授業の中だとか、体育の時間、そういった中とはまた違った視点からですね、様々な学びや気づきを得られるというところがあるかと思えます。

まずその行動についてですけれども、そのチームによって、一つの目標に向かって、自分の役割を果たすといった責任のある行動やリーダーシップ、先輩・後輩の先生、そういった形に対する礼儀やマナーやスポーツマンシップ、ルールや規則に沿った活動、そしてその中で得られる忍耐力、継続力、そしてチームワークに繋がるようなコミュニケーション能力、挨拶や傾聴、そして自分の思いを伝える伝達能力やそういったものを通じて、表現、そして説明する力、他者と一緒に活動する協調性、そういったところが、行動、この部活動によって、育まれているのではないかと考えました。また、こういった行動を行うにあたって、いろいろなことを、子どもたちや指導者も含めて考えていくと思います。

まず、一つの目標の達成に向かって、自分なりに考えること、そして試行錯誤しながら、その目標達成に向かって、自分の考えを努力に変えて、継続していくことが重要というようなところで、深い学びが得られるのではないかと考えていました。

また、その現状に対して、どのようにすれば目標が達成できるのか、そういったところを、顧問の先生や、仲間たち、先輩・後輩からのアドバイスをもとに、自分である程度の仮説を立てて、日々の練習を通じて、その考え方が正しいのか行動が正しかったのかということを実行していくというような、思考が養えるのではないかと考えます。

そして、様々な物事を前向きにとらえていくプラス思考、こういったところも強く身につくのではないかと考えました。そして、自らのスキルアップに向けて、上級生、また他校の生徒等の様子も観察しながら、そこからいろいろな成功のコツやポイントを発見するという経験、こういったことは、やはり部活動において得られたものなのではないかと考えて、こういった人の特徴や変化、自分の気持ち

の移り変わり等に気づくことによって、心の成長に繋がるといったところも考えられました。

こういった部活動による経験から得られるものっていうのは、自分だけのものでもなく、こういった人との触れ合い等を通じて、子どもたちの成長や発達にプラスの影響を及ぼすことが多く期待されています。そういった行動力や思考力というのが、子どもたちの今後のキャリア形成に繋がることでもありますし、こういった活動を通じて得た自信がこれからの生活において、その活動を超えるもしくは同等の経験、実績を達成していけるのではないかとこのころに期待します。

こういったところが、私の目線からは、この活動のすばらしさになるであろうと考えておりますので、実際に新しい考え方で、これから活動様式が考えられていきますけれども、こういった考え方、得られる経験、実績等を持続して、次の新しい部活動の考え方につなげていければというところで、尽力させていただきたいと思っております。

ジュニアリーダーの活動につきましても、地域の活動や表彰式などで、子どもたちのコメント等をお聞きしていますと、やはり、その地域の大人の皆様や、違う学年の子どもたちと共同しながら、活動を経験するというところ、これは部活動と同じように、非常に日常ではなかなか経験できない、貴重な経験を積んでいく、非常にいい場所であるということも考えられます。

また、地域活動の始まりでもあるこの活動については、町会や青健委員会の次世代の担い手候補として、非常に有力な人材としても、今後の活躍を期待したいところであります。

私からは以上です。

○区長

ありがとうございました。それでは、野田委員の発言に関連いたしまして、ご意見のある方はどうぞお願いいたします。長沼委員、どうぞお願いいたします。

○長沼委員

ありがとうございました。野田委員がおっしゃるように部活動、あるいは地域化したクラブの活動にはたくさんの意義があって、それが子どもの成長発達を促すっていうのは、これまでの部活動の良さが証明していますので、そういう良さを引き続き、それは学校でやるにせよ、地域クラブ化するにせよ担保していく、いい指導者を確保して場所もあって、そういう板橋区にこれからしていくんだ、っていうことだと思うのです。まさにそのことは、今日のテーマであるスポーツとか文化芸術などの生涯学習社会を目指すということにあるのだと思うのです。そのためにはどうあるべきなのか、学校からどんなふうに展開していくのか、あるいは学校ではここは残すが、でも地域クラブでできるものはあるとかジュニアリーダーの事業と上手く絡んでできるとかいうのを、板橋のいろんな方々をつくっていくことだと、改めて野田委員の話を聞いて思いました。絵本のまち板橋とか教育の板橋とかありますが、子どもたちが好きなスポーツとか文化系活動ができる板橋として発信していくことが、今後できればいいと思って聞いていました。

○区長

はい、ありがとうございました。他にいかがでしょうか。では、中川教育長どうぞ。

○教育長

多分こういう話があると、今までのよさがすべて消えうせていく、どうしてくれるんだっていうですね、そんな話になっていくのかなと思うんですが、今、野田委員もおっしゃっていたように、長沼委員も今おっしゃっていたようにですね、要は、

これから作り上げるものは、今までのものが消えさっていくものではなくて、踏襲していくんだよっていうような新しい価値観、というものと同時に、今まで築き上げてきたものもそのまま踏襲していくんだよっていうことが、やっぱり説明の中に入っていないと、「何か活動だけが変わるんだよ」っていうのではなくて、「その文化そのものも引き継いでいくんだよ」っていうことが、とても大事な説明の際のポイントなのかなということをお話を伺いながら思いました。ありがとうございました。

○区長

はい、ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

それでは、続きまして、中川教育長からお願いいたします。

○教育長

それでは、もう今までの委員さんの部分とかなり重複してきますけれども、私の考えを述べさせていただきます。

はじめにお伝えしたいことは、本日のテーマとなっている学校部活動の地域移行の議論は、学校部活という制度自体に幾つかの課題があり、その持続可能性が危ぶまれておりますが、部活動そのものが悪いということではないということです。今、野田委員からもお話がありましたように、部活動には、これまで果たしてきた役割や意義が多分にありました、あるいはあります。参加する生徒の達成感の獲得、自己肯定感、責任感、連帯感の受容、時には、学習意欲の向上に資することなどもあり、教育的意義を有してきました。それがここまで議論があったように、少子化、あるいは先生が果たさなければならない役割の一方的な増加によって、学校の部活動が持続可能でなくなった、このことが、学校部活動の地域移行を考えなければならなくなった最大の理由であります。残念ながら、板橋はまだそのあたりが、極端な少子化、先ほど長沼委員がおっしゃったように、そういったところが見えにくいゆえにですね、こういったことが大きな問題になっていませんけれども、実はじわじわと、先ほど区長がおっしゃっていたように、実際に起こってきているんだって、この認識も必要なのかなというように思っています。理由はともあれ、このまま、もし何もしなければ、部活動はいつしか衰退してしまうという可能性が高いと思われま。

現在でも、学校現場では、教員の人事異動に伴い、前年度まで存在していた部活動が、翌年度には消滅せざるをえないという状況が、少ないながらもあります。このようなことが起きると、そこで活躍していた生徒、これから参加して頑張った生徒は、その活動を通じて得られたであろう成長の機会を失ってしまいます。そうなる前に、何がしかの策を今打たなければならないと私は思っています。国が示している部活動を地域移行するという方向性は、何か地域に丸投げするというイメージを与えかねないものもあるのですが、部活動が失いかけている持続可能性を維持しつつ、生徒たちに成長する機会を提供すること、これも先ほど野田委員がおっしゃっていたように、様々な良さをやはり引き継いでいくという点で、この課題の解決策として、地域移行というのは有効な手段であると考えます。

私は部活動の地域移行については、生徒視点で、子ども視点で三つの環境づくりが大切であると考えています。

一つは、区内すべての中学生のやってみたいにこたえる環境づくりです。現行の部活動は、顧問となる先生の人数と専門性に左右されます。今後、板橋の子どもたちには、区内どこかを探せばやりたいことをやれる環境をつくってあげたいと思います。特に、今年は、様々な世界大会があつて、先日は、バレーボールがあつたり、それからバスケットボールがあつたり、これからラグビーが始まつたり、そういっ

たものに影響を受けるという意味合いでは、やりたいという子どもたちの願い、中学生の願いにこたえられる環境づくりが必要であるという点。

二つ目は、多様な地域で多様な世代とともに、多様なスポーツ・文化芸術活動への参加が可能な環境づくりです。現行の部活動の制約の一つである学校単位から脱却し、いろいろな場所で、多様な世代の人とともにスポーツや文化芸術を、一つと言わず、たくさん経験できる環境を提供できればと思います。日本の部活動は、本当に一つのものをとことん追求するという良さもある反面、いろいろな運動、あるいはいろいろな文化活動を経験するということが意外に少ないのではないかなというところでは、この地域移行ということで、様々な活動に参加できるチャンスを与えられればというように思っています。

三つ目は、受け皿となる地域、或いは活動が中学生にとって新たな居場所の一つとなるような環境づくりです。部活動の地域移行を進めた結果として、地域が子どもたちにとって、これまで以上に親しみやすく居心地が良く、いつでも自分を受け入れてくれる家庭でも学校でもない、第3の居場所になるような環境づくりを進めたいと思います。

先ほど、高野委員からもお話がありましたように、ジュニアリーダー活動など、まさにそういったものなのかなというように思いながら、ジュニアリーダー活動と部活動をつなげるという発想も、今回初めて区長のお話の中にあっただけですけども、そういった発想もしかるべきだなというように思いました。

ところで、この学校部活動の地域移行はそれを実際に行おうとすると、様々な課題が発生するというのもまた事実であります。地域移行を進めていく上で、まず一番大切なことは、生徒たち子どもたちの不安感を払拭する、部活動がなくなる、今小学生は中学校に入るときに、部活動を楽しみにしている子どもたちもたくさんいるわけで、それがなくなるっていうことは、どういうことなんだという不安感を、そういったものを払拭するという、そのために十分な説明責任を行っていくことが大事なのかなと思います。学校現場にとっては、先ほど、武田校長先生のお話にもありましたように、非常に厳しい状況の中で、部活動指導を含めた先生という仕事のやりがいどこに求めるかという問題、保護者にとっては、おそらく今後一定の費用負担を求めること、地域移行により、新たに生徒を受け入れる先にとっての準備の問題、行政にとっては、これら一連の対応に係る新たな財政負担の問題、こういった諸課題を一つ一つクリアしていきながら、しっかりと前に進んでいかなければならない、失敗の許されない取組であります。

そのような点からも、学校部活動の地域移行という大改革は、多くの方の納得と合意を得なければならない、大変時間を要するものであると私は思っております。

そのため、地域クラブの整備については地に足をつけて、着実に進めていくことが重要です。

学校部活動の地域移行が時間のかかる改革である以上、同時に現行部活動についても、地域連携という手段、或いは地域展開という手段を活用して、合同部活動化等を図りながら、部活動指導員などの外部支援人材を積極的に入れて、地域移行を補完していく必要があります。

さらには、学校部活動に関わる受け皿を行政の力だけで何とかしようとするのではなく、スポーツ関係者、文化・芸術関係者、青少年健全育成関係者、学校支援地域本部の方々など、地域と一体となって整備していくことも重要だと思います。学校部活動の地域移行という改革は、現行部活動の持続可能性に疑問符がついたことが発端ではありますが、改革には心理的抵抗がつきものです。課題解決のためととらえると、やらねばならないといった強制感が伴います。

それよりも、中学生や先生、地域の方々に、部活動に代わる新しい価値を提供するのだという視点で取り組めば、多くの方々の共感、納得感を得られるのではないかと思います。そういう意味でも、今日お話があったように、これまでの部活動の良さを引き継ぎながら、よりよい形の、いわゆる生涯スポーツ・生涯学習に繋がるモデルをつくっていくといったような、そういった新しい価値を生み出していく、或いはそれを強く説明していくことが、教育委員会事務局としても、あるいは板橋区としても重要になっていくのかなというように思います。以上です。

○区長

はい、ありがとうございました。それでは、中川教育長の発言に関連いたしまして、ご意見のある方はどうぞお願いいたします。いかがでしょうか。高野委員、どうぞお願いいたします。

○高野委員

小学校の卒業式や中学校の入学式に出席すると、小学生は中学校に入って部活動をするのを大変楽しみにしていたり、中学校の入学式では、これから3年間で部活動を頑張りたいというような意見がよく聞かれます。そういう中で、今ある部活動が、そのままではなく変わっていくということは、正しく子どもたちにも理解してもらう必要があるというように思いました。

野田委員がおっしゃったように、部活動が子どもたちに与えるすばらしさ、そしてまた、それは変わらないんだということ、そして、新しい受け皿として、新しい価値観を加えていくんだというようなところを、これから中学生になっていく、小学生やその保護者の方に、十分伝えていくことが、とても大事なことだなと思いました。

○区長

はい、ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

皆様から、貴重なご意見を頂戴いたしまして、今後の部活動のあり方、または課題等、いろんな可能性というものを何かこの今日の会議を通じまして、いろんな価値観、新しい区の方向性というものが何となく見えてきたような感じがしましたし、一方では、部活動のこれまで果たした役割といたしまししょうか、いろんな面で大切なものがあるということも、十分に今日の会議から、理解ができました。それぞれの経験と立場から、皆さんからご意見をいただき、本当にありがとうございました。

これから、この部活については、様々な取組を、今進めているところが一部ございますけれども、お子さんや環境を見ながら、区も教育委員会と一緒に進めていきたいというように考えておりますので、これからも皆さんの関わりやご意見、または地域のご意見等も含めて、進めてまいりたいと思いますので、よろしく願いしたいと思います。

長時間にわたりまして、誠にありがとうございました。

本日、皆様と共有いたしました課題、方向性につきましては、板橋区全体としてどんな施策や展開ができるのかを、検討してまいりたいと存じます。

今後とも、区長部局と教育委員会がより綿密に連携協働して、区民一人ひとりの皆さんが、可能性とチャンスを広げる学習の場として、機会が提供できるように、また、持続可能な社会をするということも含めて、取組を進めていきたいというように考えております。

教育委員の皆さんにおかれましては、より一層のご理解、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げて、本日大変お忙しいところお集まりいただきましたことに対しまして、改めて感謝を申し上げて、閉会の言葉といたします。本当に、今日はありがとうございました。

これもちまして、令和5年度板橋区総合教育会議を閉会といたします。
ありがとうございました。